

ほくそう 北宋の三大家と個性の表現

(教科書40〜41ページ)

こうしゅうかんじきしかん 黄州寒食詩卷

北宋・一〇八二年／蘇軾

(空庖煮寒菜)
破竈燒濕葦。那知是寒食、但見烏銜紙。君門深九重、墳墓在万里。也擬哭塗窮、死灰吹不起。

大意

(人気のない台所で粗末な野菜を煮ようと、)壊れたかまどに湿ったあしの葉をくべる。寒食の日(中国では清明節の前日に火を用いずに冷たいものを食べる)だとは知らなかった。烏が紙銭(寒食の日に墳墓で紙銭を燃やして祭る習慣がある)をくわえて飛んでいる。天子の御許は遠く、左遷の身では近づくこともできず、ふるさとの墳墓も彼方である。道のないことを嘆こうにも、冷え切った灰では吹いたところで燃えたたない。

こうけんしかん 虹県詩卷

北宋・一一〇六年頃／米芾

再題。
碧榆綠柳、
舊游中、
華髮蒼顏、
未退翁、
天使殘年、
(司筆研、……)

大意

再び題する。かつて運河沿いの榆や柳の中で遊んだところ。白髪と青白い顔でいまだに退かない老人。天は私の余命に筆硯をもたらし、……

しやうふうかくしかん 松風閣詩卷

北宋・一一〇二年／黃庭堅

松風閣
依山築閣見平川、
夜闌箕斗插屋椽、
我來名之意適然、
老松魁梧數百年、
斧斤所赦今參天、
風鳴鳩皇五十(弦。)

大意

松風閣

山によりそって築かれた楼閣から広い長江が見渡せる。夜が更けると、箕・斗の星座が、軒端のたるきにかかっている。私がこの楼閣を「松風閣」と名づけたのは、心境によくかかっている。老松は数百年を経て堂々とたくましく、切り倒されることもなく、今では天にも届くほどである。松風は女媧氏(伝説上の女神)の五十弦の瑟(楽器)のしらべのよう、……